

糸

車

編集 山形村ふるさと伝承館



▲ 小坂地区の長屋門

民家

かつて、わが国の民家は、北

日本では縄文時代からの竪穴住

居の伝統をひく地床（土間）住

居が多く、南日本では弥生時代
以降の高床式の建築が支配的で
あつたという。

何れにしても、以来民家は長
い間、それぞれの地方の特色を
残してきたが、近年に至つて急
速にその特色を失いつゝある。

村ではもはや藁葺きや板屋根
の民家は見るべくもないが、今
のうちに記録として残しておき
たい民家はまだある。

山形村の民家

本棟造り

リ

江戸時代末期には村の方々で本棟造りの建物が建てられた。この地方の特色として屋根に大きな雀踊（すずめおどり）があり、住宅の土間が広く、裏口が設けられている。左は大池村と称されていた頃の建築である。時代の変遷にともない復旧補修され現在の姿になった。

▲旧大池村内に今も残る本棟造り民家



右は竹田村と称されていた頃の本棟造りの民家である。屋根などは今様に補修されてはいるが当時の原型を良く残している。特に二階の出格子は立派である。

出格子の
拡大写真▼



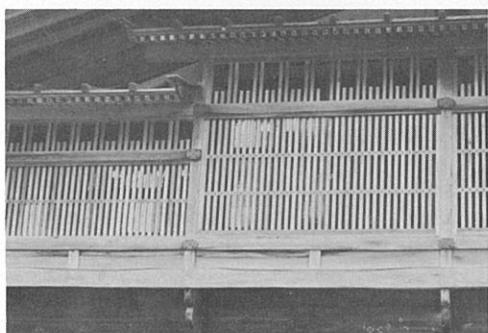
▼長屋門（小坂地区）



長屋門

屋敷の入口には下人たちが住んだ供部屋と称される室のある門長屋があった。明治時代がすぎ大正、昭和の頃はこの長屋門のことを乳門とも呼んだ。それは観音開きの二枚戸には鉄製の乳型の飾金具が両側にあつたからである。今は戦争に供出され普通の板戸となつたのが惜しい。

▲旧竹田村の本棟造り民家





▲土蔵（上竹田地区）

貴重な土蔵

江戸時代、幕府は町家(民家)の瓦葺きを禁じていたが、明暦三年（一六五七）の大火灾後、土蔵に限って瓦葺きを許可した。

以後土蔵は重要なものを貯蔵する防火建築として江戸を中心に発展し、明治以後、東日本一帯に江戸風の土蔵造りが広がったといふ。

四面を土や漆喰（しつくい）で塗った倉庫。火災や盗難から守るために建物で、ひと昔前の農家は、ほとんどが自給自足に近い生活だったので、収穫した穀物をたくさん置いておいた。日常のあまり必要のない衣類、寝具、什器なども保管し、必要によってとり出して使っていた。



▲土蔵の入口部

蚕は湿気をきらい、また温度変化もきらうため、窓を多く設け通気を考えた造りであった。長野県内でも山形村一帯は最も養蚕が盛んな所で、春蚕・夏蚕・秋蚕・晚秋蚕まで早朝から夜中まで命がけで蚕を守育した思いが、蚕を飼わなくなつた今でも部屋一杯につまっている。

写真の蚕室は昭和初期に建てられたものである。

蚕室



▶蚕室（下竹田地区）

ふるさと伝承館「あんない

- ・会館日 毎週土曜日 P.M.一時～五時
- ・入場料 大人一一〇円 小人 五〇円



◆伝承館蔵の錫絵

土蔵の壁などを塗喰を塗った上に錆で風景や肖像などを描き出したものを錆絵といふ。明治から昭和にかけて村で左官業を営んでいた小坂の鈴木熊吉は錆絵の名人だった。今ふるさと伝承館に展示されている二面の錆絵額は「鈴声」と号した熊吉翁の作品である。

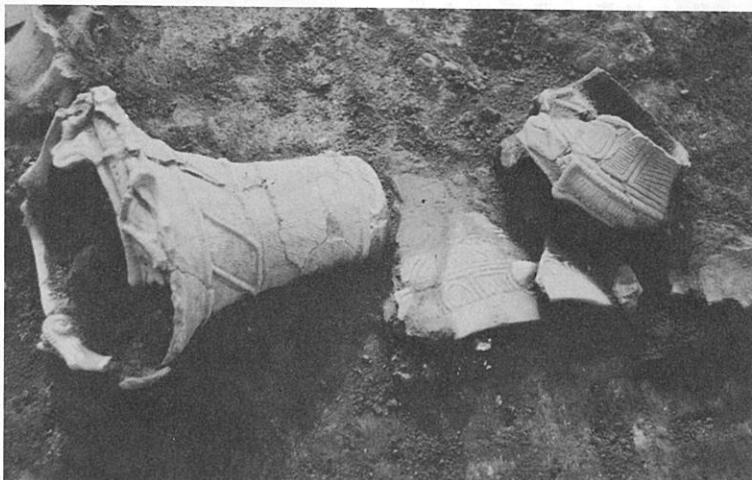
下竹田地区▶



村の埋蔵文化財は今…

山形村は豊かな自然と肥沃な大地に恵まれ人間が生活するには最適な地です。その為新しい住宅が村のあちこちで建設され人口が急増しています。更には大規模店の計画もあり村の様子が変わりつつあります。

さて生活環境のすばらしさは太古の昔でも変わらなかつたようで約六千年前から生活の痕跡が認められます。その痕跡は脈々と我が村の大地に刻み込まれ、私達が村の歴史を知る上で貴重な資料として今なお私達の生活する地面の下に埋もれています。この資料は「遺跡」とか「埋蔵文化財」と呼ばれます、住宅建設や大規模店出店などの開発行為はこの重要な遺跡を無造作に破壊してしまいます。遺跡は歴史の教科書



▲山形村は埋蔵文化財の宝庫（淀の内遺跡）



◀ 調査風景（洞遺跡）

では感じ取ることのできないことを自らの目で肌で感じることがで
きる大切なことであり、一度破壊されれば二度と元に戻すことのでき
ない宿命を背負っています。

理想と言えば遺跡を破壊しないのがベストですが、我々の生活の進歩に開発は欠かせないことであり、開発と遺跡の保護について充分な話し合いの結果とられるのが遺跡の発掘調査です。今までには上大池の淀の内団地建設に伴う調査が有名ですが今年度、上大池の洞遺跡、小坂の中原遺跡において調査がなされ家が建てられました。今後も開発に伴う発掘調査は増加傾向にあるでしょうか。村の埋蔵文化財を適切に守り、活用していくには村民の皆さんの協力が

太平洋戦争終結から50年と節目の都市であった1995年、全国各地で戦争の惨禍を伝え、永久の平和を願う行事が数多く行われた。山形村にも当時の様子を伝える資料が数多くあり、村民の皆さんとの協力のもと11月4日・5日の両日、「戦後50年展」が開催された。

両日は村内はもとより、村外からも約400人が来館。戦争の悲惨さを物語る資料を前にして来館者は足を止め、ひとつひとつ食い入る様に見入っており、平和への誓いを新たにしたことであります。

に兎入ており、平和への誓いを新たにしたことであろう。
終戦から既に半世紀、戦争の惨禍を語り伝える世代が減りゆく中で
戦争中の資料もまた序々に廃棄処分されている状況のようである。これからは村民の皆さんにも協力していただき、貴重な資料を後世に残
していくことが、今を生きる我々の責務であろう。

平和への誓い新た

『戦後50年展』

ふるさと伝承館事業報告